

児童が主体的に学び合い、満足感の得られる授業の手立て

高度学校教育実践専攻
教員養成特別コース
齋藤 友紀子

実習責任教員 木下 光二
実習指導教員 端村 達也
実習指導教員 葛上 秀文

1. 課題設定の理由

筆者は児童が主体的に学び合い、満足感の得られる授業を理想としている。

その理由は、疑問だったこと、理解しにくいことが教師の手立てや友達の支えによって「解った」「できるようになった」と実感した時、学習に対する満足感と自信を得られるからである。それは、大学院1年時での実習の学級担任の先生の授業において、児童が主体的に学習し、満足感をもって学習していると感じられたからである。そこで、学級担任の先生が行った4年生算数「平方メートル」と筆者の授業実践を比較して取り上げる。

(1) 学級担任の授業より

① 4年生算数「平方メートル」

授業導入で児童は自分の部屋の面積を教師に問いかけられたが、答えることができなかった。しかし、教師の手立てによって学んでいくことで、授業後半には自分の部屋の広さを1平方メートルのいくつ分という考え方で表現することができていた。

② 児童の実態に合った手立て

学級担任の先生は、以下の手立てを行っていたと考える。1つは導入で既習事項を押さえ、短冊に書いて黒板に貼ったことである。2つ目は、児童の生活に結びつくような発問や、具体的に想像させる発問をしていることである。例

えば授業導入での「自分の部屋の面積はどのくらい?」は、児童に自分の部屋の大きさを表すにはこれまで学習した単位では表せないことや、自分の部屋の広さを表すにはどうしたらよいのかという疑問を起こさせる。実際に1平方メートルの部屋に入ることで、実感を伴って大きさを学んでいた。自分の部屋の広さを、1平方メートルを使って表現していたときの児童の表情からも、とても満足感を持って学習できたことがわかった。

(2) 筆者の授業実践について

しかしながら、筆者が大学院1年時に行った4年生国語科“ごんぎつね”の授業実践では理想とはかけ離れた教師主導の授業となり、児童の学ぶ満足感の得られない授業だった。

授業を予定していたところまで終わらせることができず、児童は“ごん”と“兵十”の気持ちのすれ違う様や大きな心の変化を十分に掴むことができなかった。授業を通して“ごんぎつね”のお話がよりわかるようになったという充実感を得られなかった。

2. 研究の目的と方法

(1) 研究の目的

児童が主体的に学び合い、満足感の得られる授業の手立てを考えることを目的とする。そこで本研究では、学習のねらいを明確にし、ねら

いに迫ることのできる教師の手立てと発問を考える。

(2) 研究の方法

- ①教材を通してどのような力をつけたいのかねらいを明確にし、目標を立てる。
- ②児童の思考の流れに沿った指導案、指導細案を立案する。ねらいに迫ることのできるような発問を考える。
- ③児童の実態に合わせた手立てを工夫する。教材提示の工夫、導入で既習事項の振り返りを行うことや、児童が学習のねらいを掴むことができるように手順の確認をすること等。
- ④児童の思考する時間、活動する時間を十分に取る。
- ⑤児童同士の話し合いや相互の学び合いが生まれるような場面を考え、検討する
- ⑥板書やワークシートを工夫する。

3. 授業実践と分析・考察

授業を実践し、分析と考察を行うことにより次のような成果と課題が明らかになった。

(1) 1年生国語科「こんないしをみつけたよ」について。(2012年6月26日実施)

<手立て>

- ①児童の石を拾った経験を問いかける。
- ②教師のお気に入りの石を提示し、石の特徴や石の名前について話し合わせる。
- ③教師のお気に入りの石から名前をつけたい石を選ばせ、児童が考えた石の名前を発表させる。
- ④友達の石の名前のよさや形の面白さを話し合わせる。

<成果>

- ①導入で石を拾った経験を話し合ったことによ

り、教師のお気に入りの石がどんな石か興味をもって主体的に話し合うことができた。石を拾った経験を話し合う活動は児童の実態に合っていたからだと考えられる。

- ②教師が用意した石が児童の興味関心を強くひきつけるものだったため、主体的に教師のお気に入りの石について話し合うことができた。
- ③教師のお気に入りの石を提示し、話し合ったことにより、児童自身もお気に入りの石を見つけて名前をつけたいと意欲的にすることができた。

<課題>

- ①指導案、細案については児童の思考の流れを考えて作ったが、分析から児童の思考の流れには合っていなかったことがわかった。
- ②板書を書くタイミングが遅く、教師が板書している間、児童の話し合いが止まってしまう、教師が書き終るのを待たなければならなかった。
- ③ワークシートが児童の実態に合っていなかった。
- ④展開2に時間をかけすぎて、展開3の時間を十分にとることができなかった。

(2) 1年生図画工作科「かたちからうまれたよ」について。(2012年9月28日実施)

<手立て>

- ①教師が包装紙をちぎって並べて見せ、皆で何に見えるか話し合わせる。また、作品を作る時間を十分確保できるようにする。
- ②完成した作品を皆で鑑賞する。

<成果>

- ①導入で教師が紙をちぎって並べて見せて、皆で何に見えるか話し合ったことで、児童が包装紙をちぎって形をつくることに興味を持ち主体

的に活動することができた。

②振り返りシートの分析から、児童が作りたいものを作ることができたため、満足感を感じることができたと考えられる。

<課題>

①導入で十分に本時の活動を掴ませられなかった。どんなちぎり方をすると色々な見方ができて新しい形が生まれるのか十分に教材研究する必要があった。小さくちぎった形を並べていくのではなく、大きい1つの形から向きを変えたり見る方向を変えたりすることでいろいろな形に見えることを掴ませられるように、ちぎり方の工夫を考えて見せるべきであった。

②鑑賞の時間を十分にとることができず、友達と作品のよさを共有することによる満足感を得ることができなかったと考えられる。

(3) 1年生道徳「きゅうしょくしつをみて」について(2012年11月5日実施)

<手立て>

①児童が普段お世話になっている給食センターの調理員さんが働いている姿を映像で見せる。

②おかずの量に着目した発問や挿絵をもとに調理員さんの人数を問いかける。

③給食センターで働くS先生のお話を映像で見せて、調理員さんが自分たちにおいしく食べてもらうために一生懸命働いていることを実感させ、主体的に調理員さんに感謝の手紙を書きたいと思わせる。

<成果>

①授業導入で給食センターのトラックを写真で提示したことにより、主体的に学習しようとする姿が見られた。児童が日常的に見たことがあ

るため、知っていることを話そうとしていた。

②給食センターの動画は児童の興味関心を引き付け、調理員さんが一生懸命働いてくれているということを実感させられるものだった。

<課題>

①ねらいとする価値へ迫ろうと教師が誘導的に発問し、児童の発言を狭めてしまったことで主体性を奪ってしまった。また、何度も同じことを繰り返し発問してしまった。発問計画に課題があった。

(4) 1年生音楽科「いろいろなおとにしたしもう」について(2012年12月3日実施)

<手立て>

①児童が大好きな“シロクマのジェンカ”と“踊る子猫”で友達と踊って気持ちをほぐし、主体的に音楽に合わせて体を動かすことができるようにする。

②本時はどのような曲を聴くのか期待させる。

③“シンコペーテッドクロック”を3回聴かせる。児童が気付いた面白い音を板書し、面白い音が何を表しているか考えながらシンコペーテッドクロックを聴かせる。

④ウッドブロックの音に合わせて体を動かせることで、シンコペーション等楽曲の面白さに気付かせる。

⑤児童に楽器を使ってシンコペーテッドクロックの曲に参加させる。児童の席を班の形にさせ、打楽器を用意し、1曲交代ですべての楽器を演奏できるようにする。

<成果>

①導入で扱った“シロクマのジェンカ”と“子猫のワルツ”は児童の気持ちをほぐし、主体的

に音楽に合わせてダンスをすることができた。導入で「みんなの知っている曲が流れるよ」と曲名を言わずに児童に何の曲か期待させたことで、今日はどんな曲を聴くのかと主体的に音楽を聴こうとする態度が見られた。

②児童の思考の流れを考えながら、指導案、細案を考えたことで、教師の考えたねらいに向かって児童は主体的に音楽を聴くことができたと考えられる。児童が打楽器の音にとっても興味関心をもって聴くことができていた。

③面白い音を探したり、その面白い音が何を表しているのか考えさせたりすることで、主体的に音楽を聴こうとする姿が見られた。

<課題>

①児童は、本時のねらいをほぼ達成できたと考えられる。しかし、ねらいの中で重点を置きたいのは“楽曲や演奏の楽しさに気付いたりできるようになること”の部分である。実践では、音楽を構成している楽器の音や音から想像を広げることに重点を置いてしまい、楽曲の演奏の楽しさに気付くための時間があまりとることができなかった。つまり、教師が1時間のねらいを詰め込みすぎており、一番児童に楽しませたい部分があいまいになってしまったと考えられる。

②児童は、楽器を使ってシンコペーテッドクロックに参加する活動をとっても楽しみにしていたと考えられる。しかし、話し合いや楽器の紹介に時間を取りすぎて展開3の楽器を使ってシンコペーテッドクロックに参加する時間が5分しかとることができなかった。そのため、児童は楽器を十分に触ることができず満足感を感ぜられていなかったと考えられる。

4. 研究のまとめ

本研究で得られた成果と課題から、児童が主体的に学び合い、満足感の得られる授業をするためには、以下の8点のことが明らかになった。

- (1) 児童の思考の流れに沿った指導案、細案を考えること。
- (2) 児童の経験や知っていることを引き出す発問を取り入れること。
- (3) 教材の魅力を引き出せる教材提示の工夫を考えること。
- (4) 児童同士の話し合いや相互の学び合いが生まれるような場面を作ること。
- (5) 教材研究を行う際には、教師自身が実際に書いてみたり、作ってみたりすることで魅力を探る。そして児童に何を一番掴ませたいか考え、ねらいを決める。
- (6) 児童の思考の流れと主発問をもとに、ねらいに迫ることのできるような発問計画を考える。
- (7) 児童の思考する場面や活動する場面では十分に時間をとれるようにする。
- (8) 板書やワークシートは授業の流れに沿ったもの、児童の実態を踏まえたものにする。

今後も研究で得られた学びを活かして、授業を考えたり、反省を行ったりして児童が主体的に学び合い、満足感の得られる授業を目指していきたいと思う。

引用・参考文献

- 1 佐藤学(2000) 『授業を変える 学校が変わる』 小学館
- 2 佐伯胖(1983) 『子どもと教育を考える 3「わかる」ということの意味—学ぶ意欲の発見—』 岩波書店